



虹のかけ橋



第40号/平成28年9月

兵庫県立但馬やまびこの郷

<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

できることから始めよう

「あれこれ考えても動けないんだから、できることから始めようと思いました」これは、やまびこ親の会に参加されたある保護者の言葉で、不登校支援の大きなヒントになると思われます。

不登校状態になると、「学校へ行く」ということが、ことさらにクローズアップされます。身体症状が出たり、家族との断絶が起こったりしている状態で、「登校する」ことだけが目標になると、達成できなくてますます自信をなくし、負のスパイラルに陥ることになりかねません。

学校復帰へ向けてのハードルは個人差がありますが、当所では小さな成功体験の積み重ねでエネルギーを高めることが登校につながり、家庭生活の充実がそのベースになると考えています。

その指標を「プラス1(ワン)チェックシート」にまとめました。「家でできることを増やすのも、大切な登校の準備だよ」と声をかけ、一緒に目標を立てたいものです。

プラス1チェックシート

生活・家族関係

- ・朝、昼、夜、食事をとる
- ・毎日入浴する
- ・毎朝洗顔、歯磨きをする
- ・ゆっくり睡眠をとる
- ・散髪する

- ・好きなことをさがす
- ・趣味に没頭する
- ・マンガや本を読む

- ・家族と一緒に過ごす
- ・家族と会話する
- ・家族とテレビを見る
- ・家族と遊ぶ
- ・手伝いをする

外出・友人関係

- ・部屋のカーテンを開ける
- ・部屋から出て生活する
- ・家から外に出る
- ・近所を散歩する
- ・車に乗って外出する
- ・買い物に出かける
- ・図書館で本を借りる
- ・バス、電車に乗る

- ・友だちからの手紙を読む
- ・友だちとメールをする
- ・友だちと電話をする
- ・友だちと会う
- ・友だちと話す
- ・友だちと遊ぶ

学習・登校関係

- ・本を読む
- ・新聞を読む
- ・漢字のドリルをする
- ・計算の練習をする
- ・塾に通う
- ・宿題をする

- ・学校からの配付物を見る
- ・先生に出会う
- ・先生と会話をする
- ・登校の仕方を相談する
- ・学校の周りをドライブする
- ・校門にタッチする
- ・放課後登校する
- ・夜間に登校する

小さなことでも約束を守ったり、できたりすればアイ・メッセージで「ありがとう」「うれしいわ」等の声をかけ、心のエネルギーを高めていく支援が大切であると考えます。



不登校児童生徒支援のために学校復帰支援ガイドラインを作成しました。
当所ホームページ研究成果・研修資料のコーナーに掲載していますのでご利用下さい。

<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

「不登校児童生徒の 学校適応に役立つ学校づくり①」

福岡教育大学 教授 西山 久子

不登校状態にある子どもは、学校適応に対して大きな困難を抱えています。筆者の教育臨床経験などをふまえ、不登校へのリスク対応として、学校が行える予防的な取組をご紹介します。



1 援助体制における三段階式分類の周知

児童生徒の援助にかかわる方々にとっては、共通の表現になって久しい「1次的援助（支援）／2次的援助（支援）／3次的援助（支援）」ですが、サポートをどの程度に行うかの目安を検討する際の共通の言葉として有益なものです。しかし、意外にも校内の全ての先生方で共通理解されていないことも多いようです。そうしたことについて、生徒指導や教育相談および特別支援教育など、校内の援助ニーズにかかわる担当者と話し合い、その学校で基準を定め、深刻な支援ニーズを抱える子どもをどの段階に位置づけるか確認し、必要に応じた対策案に合意をしたうえで、新年度の会議などで校内に周知することが、校内体制の基盤作りの一つとなると考えます。年度ごとに確認し、定例の会議を設定する中で、「『気になる子』として課題を報告された子どもは、どの段階になるだろうか?」とか、「先月、2次的援助の段階に位置づけられた子どもの状況は、どう推移しただろうか?」といったことを確認したうえで、支援策を話し合うと、学校全体での共通認識が図りやすいのではないのでしょうか。

相談室登校生支援
など個別の対応

三次的援助 特別な子ども
(個別化された支援)

別室等の教室忌避
傾向の生徒の支援

二次的援助 一部の子ども
(学年等で支援を共通理解)

受入れ状態を高める
温かい風土づくり

一次的援助 全ての子ども
(クラスをたがやす)

図1 深刻さのレベルによる三段階式の種類

2 入学時の「調査書スクリーニング」

学校に入学してくる子どもたちが、明らかに不適応の兆候を示す前に、リスクの高い子どもを把握しておけると、支援の心積もりができます。それまでの学校での適応状態は、入学時に届けられる調査書などの学籍記録に表れるのではないのでしょうか? その出欠情報については、学力考査が行われる高等学校においても、漏れなく届けられる情報です。入学までの3年間程度を遡り、例えば

年間7～10日以上欠席が見られる場合、何らかの脆弱さや課題を抱えた経験があることが多く、その後の在籍中の課題を予見する重要なリスクファクターであると言えます。新しく出会う先生に「色眼鏡」をかけることにならないか、との懸念もありますが、むしろ「移行期の適応に少しだけ配慮があればあとは順調に適応できる可能性のある子ども」を共通認識することの効果の方が大きいと考えます。保護者とも交流しておくなどして、早期発見による時機に合った介入に向け、活用したいものです。

3 入学前オープンハウス

相談室が整っている学校も増えてきていますが、年度が替わって入学直前の時期に、新入生のご家庭に向け、相談室を開いて事前見学や事前相談を受け付けることが有効でした。ご案内は前年度末の「入学者登校日」などに配布をしておき、オープンハウス当日は、スクール・カウンセラーや教育相談・特別支援担当者などが来られる方の対応をします。



不安を抱えながら、新学期や新たな学校への入学の機会を「リセット」と考え、子どもを送り出しておられるご家庭にとって、困ったときにどこへ行けばよいか、そこにはどんな人がいるか、などを理解しておけることは、それだけで安心できる情報といえます。実践経験からも、多くのご家庭で、事前に相談したことが安心材料になり大過なく過ごせたという声があがっていました。

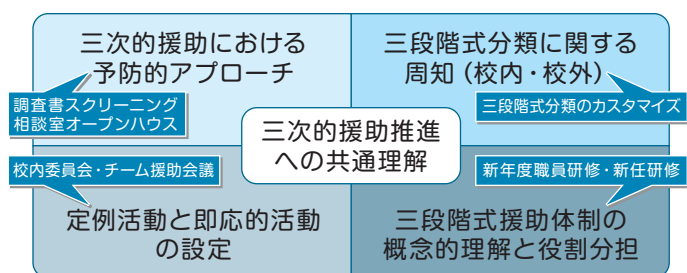


図2 援助サービスを安定させる三次的援助のシステム化

不登校傾向の子どもへの支援は、重要な対応課題であるべきですが、暴力行為などに比べ、他への影響が少ないことなどから、深刻さに応じた対応がなされていないことがあります。教員の年齢構成の激変期の今日、そうした状況を回避するため、早期発見のノウハウを共有し、全校で取り組むことで備えを行っていただきたいものです。

◆◆筆者紹介◆◆

西山 久子 / にしやま ひさこ

カリフォルニア州立大学 カウンセリング修士課程修了、兵庫教育大学大学院連合学校 教育実践学専攻修了博士(学校教育学)、カウンセリング学修士、教育学修士
 専門分野：スクールカウンセリング、学校教育相談、学校組織臨床、学校心理学

不登校担当教員研修会実施報告

平成28年5月27日（金）県立但馬やまびこの郷にて、不登校担当教員研修会を実施しました。県下の不登校担当教員60名、公開講座受講者29名、合わせて89名の参加がありました。

《公開講座》

1 演題 キャリア教育とチーム援助で不登校児童生徒支援

2 講師 兵庫教育大学 生徒指導実践開発コース 古川 雅文 先生

3 内容

- ① キャリア教育の“キャリア”とは
人生の旅や人生行路、人生の過去や現在・未来を含む経歴を意味し、全ての人に固有のキャリアがあります。
- ② キャリア教育による不登校支援
 - ア キャリア教育による予防的活動（一次的支援）
 - (ア) 生活や仕事について考えるなど、将来について展望を持つこと
 - (イ) 将来にむけて体験的な活動をする
 - イ キャリア教育による開発的活動（二次的支援）
子どもの持っている長所や得意な部分を伸ばすこと
 - ウ キャリア教育による個別対応（三次的支援）
子どもの状態に気づき、理解し、その子に応じて「未来への希望をもつ」「今を充実させて生きる」といった意識をもたせること
- ③ ワーク（サークルテスト、楽観的思考、好きな役割、タイムマシーン・クエスチョンなど）の実践を行っていく上では、以下の主なキーワードについて意識していく必要があります。
傾聴、共感性、認める、受け入れる、やりたくない子に無理強いしない、楽観的になる方法（ポジティブな思考をする、好きなことをする）など
- ④ チーム援助では、問題志向から解決志向へ考え方を切り替えることがポイントとなります。
状況の把握と仮の目標を設定し、問題状況のアセスメントやリソース探しを行います。

※ 内容について詳しく知りたい方は、当所ホームページ 指導者用資料のコーナーをご参照ください。

《参加者の声》

- ・ 古川先生の講義で「問題志向ではなく解決志向が大切であること。治療ではなく、肯定的側面を大きくすることを忘れてはいけないということ」が印象に残った。また、物事の見方、捉え方は心の持ちようによって変わることをワークを交えながら説明していただいた。
- ・ キャリア教育という観点からのアプローチがとても新鮮で、自己理解、チーム援助についての具体策を教えていただいた。解決していくためのポイントが、目が覚めたようによく分かった。
- ・ 不登校の現状、対応のあり方と不登校担当教員の立ち位置やコーディネーターとしての役割を再認識することができた。

